

Splendid Marvelous Tours

貴女の妄想叶えます

Episode 6

誘拐と陵辱の
全裸サンバ



濠門長恭

目次

1. 前夜	- 8 -
2. 誘拐	- 13 -
3. 基地	- 46 -
4. 輪姦	- 71 -
5. 幕間	- 87 -
6. 狂舞	- 98 -
7. 救出	- 122 -
後書き	- 132 -

Splendid Marvelouse Tour へようこそ！

弊社では貴女様の被虐願望を叶えてさしあげ
るために、Suspenseful Option System
を御用意致しております。

Non[Vartual / Fantasy / Role-playng] 最少
催行人員は1名様です。

末尾のメールフォームより、できるだけ詳
しくご要望をお知らせください。

弊社が貴女様に最適なプランを個別に設計
させていただきます。

なお、貴女様の安全は社会的にも肉体的にも
守れるよう最大限の努力を致しますが、必
ずしもこれを保障するものではありません。

(現在まで、事故例はありません)

弊社にて定期的に催している企画もござい
ます。国内限定で安全性も高く、料金も超格
安に設定していますので、まずはこちらをお
試しになられることを推奨致します。

1：新年寒中水泳 1月4日（日帰り）

催行人員：1名様～30名様

参加費：交通費のみ（諸経費はお客様負担です）。

・男性同伴者との参加も可能です。（推奨します）。

・禪での参加ですが、胸に晒を巻いていただきます。

2：禪海女ショーと夜の鮑売り 夏季随時、日程応相談。

催行人員：1名様～3名様

参加費：交通費のみ（諸経費不要）

・地元女性の参加者が素潜りを指導します。

・ベテラン海女から私的性裁を受けることがあります。

・宴席での接待は義務ですが、鮑売りは自由参加です。

(売上代金の70%を還元致します)

3：夏季柔道合宿 8月12日～8月17日

催行人員：3名様～8名様

参加費：交通費＋3万円（諸経費含む）

- ・練習、入浴、宿舎とも男女同室です。
- ・道着（上衣のみ）は素肌に着用していただきます。
- ・柔道未経験者にも、手取り足取り指導いたします。
- ・貞操の保証は致しかねます。

4：寒中座禅修行 12月10日～12月16日

催行人員：2名様～5名様

参加費：交通費のみ（諸経費不要）

- ・修行は女性のみですが、一般男性が補助します。
- ・警策は肩だけを叩くとは限りません。

- ・姿勢の悪い女性は、縄やベルトで物理的に矯正します。
- ・座禅転がしは拒否できません。ピルの使用は任意です。

その他、各種企画を検討中です。

国外でのイベントも新たに立ち上げました。
国内に比べてリスクが高くなります。

A：女囚性務所 不定期

催行人員：1名様～3名様

参加費：一般ツアー費用に準じます。

- ・実際に女囚としてVIPへの性的奉仕に従事します。
- ・看守たちの女囚への虐待は日常化しています。
- ・軽度の半永久的な肉体への損傷を受ける場合があります。

・司法取引による奉仕ですので、『犯罪歴』にはなりません。

B：ポニーガール 冬季を除く

催行人員：1名様～4名様（厩舎の空き具合によって変動します）

参加費：一般ツアー費用に準じます。

・年齢や容姿によっては、使役ロバにされることもあります。

・調教やパレードの様子は映像作品として販売されます。

・種付けは拒否できません。ピルの使用は任意です。

C：リョナファイト（対戦相手が女性の場合もあります）

催行人員：1名様または2名様

参加費：諸経費はお立替します（ファイトマネーで清算）。

- ・高額賞金の提供者（1名）に24時間レンタルされます。

- ・レンタル中のプレイ内容に異議は認められません。

（拒絶して拷問される自由はあります）。

- ・回復不能なダメージは与えないように配慮されています。

SMツアー有限公司

1. 前夜

「はあああ……もう、燃え尽きたって感じ」

ホテルの部屋に入るなり、春日茉莉^{かすがまつり}はベッドに身を投げ出した。

「六十分もぶっ続けに踊って。練習なのに、あんなに見物も多くて。さすが本場よねえ」

篠田紗耶香^{しのださやか}も上気冷めやらぬ表情だが、こちらはまだ余力じゅうぶん。

「なに言ってんの。練習であれだけなんだから、明日の本番は……想像するだけで濡れてきちゃう」

コステローロ（羽根飾り）を入れた大きな紙袋を部屋の隅にきちんと立て掛けて、タンクトップとホットパンツを脱ぐ。下は、Tストリングスひとつきり。

「先にシャワーを使いますね」

真園^ま蓄^{そのつぼみ}に断わって、紗耶香がバスルームに

消えた。

蕾は補助ベッドに腰を下ろして。はふうとため息を吐いた。バッグを開けてメイクセットの小箱を取り出し、ステージ用のメイクを丹念に落とし始める。

(わたしも露出癖はあるけれど……)

この二人にはかなわないと、あらためて思う。

紗耶香と茉莉は、国内イベントのサンバパレードでは常連だった。けれど、国内での催しは明るく健全に行なわれるものばかりだ。きわどいコスチュームとはいえ、乳首の露出すらままならない。それが不満だった。

社会人になったら、あちこちのサンバチームを掛け持ちで飛び回るなんてできなくなる。それなら、短大卒業の記念旅行を兼ねて——と、二人はSMツアー社の裏門を叩いたのだった。希望は簡潔明瞭。世界最大規模を誇るリオのカーニバルにダンサーとして参加した

い。ただこれだけなら、若干の無鉄砲ささえあれば怪しげな旅行会社を頼ることもない。しかし。カーニバルの期間中にいたるところで催されている小規模なイベントであるブロッコへの参加ではなく、全長七百メートルに及ぶサンボードロモ（サンバの道）を練り歩くコンテストチームの一員として、しかも全裸で踊りたいとなると、障壁は登攀不能な絶壁となる。

参加できるチームは三十ほど。一チームは二千人以上だが、楽隊や着ぐるみのような衣装で踊る構成員のほうが圧倒的に多い。各チームには飛び入りの外国人枠も設けられているが、それは着ぐるみ部隊の話。それぞれのサンバチームで一年間切磋琢磨してきたパシスタ（ソロダンサー）の中にビジターが割り込むのは不可能だった。

しかし。恒久化した不況のおかげで、不可能が可能になった。資金繰りに苦しむチーム

が、特別露出枠ともいうべき仕組みを設けたのだ。フロート車を先導する踊り子はエスコラ（学校と訳されるが、コミュニケーションと考えたほうが理解しやすい）の選り抜きだが、フロート車の後に続く踊り子に五十人の外国人枠を設けたのだ。参加資格は容姿端麗な三十歳までの女性で、参加費用は一万ドル。タンガでなくボディペイントを希望する者を優先する。まさに、紗耶香と茉莉のために詭えられたような規定だった。

紗耶香と茉莉は一万ドルに驚いたが、それだけでは済まない。カーニバルの期間中はホテル代も交通費も平常の数倍に跳ね上がる。それなのに、最低でも二週間は滞在して即席のリハーサルを繰り返すのだから、出費は一人あたり二万ドルを軽く超える。それでも、二人は生涯一度の夢を諦めなかった。

高山社長は二人の熱意に感動したのだが――
――またも赤字ツアーを組んだことに経営者と

しては頭を抱えたかもしれない。コミケさながらに混み合った会場で二人をきっちりサポートするには、ガイドは常に密着していなければならない。つまり、三人目の参加者の二万ドルが持ち出しになる。

もつとも、メリットもあった。女囚性務所やポニー牧場のような長期間のサポートは必要ないし、リョナファイトのような危険もない。二人のプライベートなガイド役という形にすれば添乗員の資格も不要だから、裏社員に転属させて半年になる真園蓄を独り立ちさせる手ごろなツアーだった。

紗耶香がシャワーを終えたとき、茉莉は着の身着のまま（といっても、紗耶香と同じTシャツとホットパンツだったが）、メイクも落とさずに眠っていたのだが——二人がかりで起こしてバスルームに放り込んだ。せっかくの晴れ舞台。肌のコンディションはベストに

保っておくべきだ。

2. 誘拐

午前十時までたっぷり眠って。二万ドルの後でちまちま節約もないだろうと正規のボッタクリ料金を払ってホテルの食堂でブランチを食べて。夕方の集合時刻までの時間つぶしに市内をぶらつこうとしたのだが。ホテルを出ると、カーニバル一色だった。

小規模なチームのパレードが随所で行なわれているし、打楽器隊の競演もあれば、サンバ以外のダンスコンクールもある。それらの多くは自然発生的なブロッコだが、公認のイベントも少なくない。

「どっちを向いてもカーニバルなんて、日本じゃ考えられないですね」

ガイド役ということになっているし、現地の裏事情は付け焼刃で仕込んできたが、こと

カーニバルについては、蕾の知識は二人のクライアントの足元にも及ばない。二月中旬は南半球では真夏にあたる。その暑気と群衆の熱気とで、蕾は目まいさえ覚えていた。

「トラロープもポリスも無し。日本じゃ絶対に無理よねえ」

近年は日本各地でもサンバパレードもどきはあちこちで催されているが。交通規制した車道をロープや三角コーンで仕切って、パレードと観客の間は厳然と隔てられている。半裸にコステイロ（羽根飾り）をまとった女性がTシャツの群に混じってアイスクリームを食べているなんて光景は、まずお目に掛かれない。

そんなだから、下乳までしかないタンクトップに下腹部もすれすれまで露出したホットパンツという紗耶香のファッションも、まるきり人目を引かない。ちなみに。茉莉は紗耶香とお揃いなのだが微妙に露出が少ない。蕾

にいたっては、日本の街中でも問題ない程度に抑えている——のは、露出願望の強い二人に遠慮した結果だ。

「さすがにマッパはいないわね」

尻も乳房も包まじやかにしている踊り子がほとんどだった。せいぜいTバックまで。いくら弾けていても、みんな最低限のTPOはわきまえている。

「ビーチへ行ってみようか。ずっと解放的みたいよ」

「冗談」

茉莉の提案を紗耶香が妥協の余地のない鋭さで切り捨てた。

「あそこって、観光客と強盗と、どっちが多いかわからないっていうじゃない。だいいち、海岸でマッパなんて日本でもできる」

へえ——と、蕾は認識を新たにした。紗耶香のほうが積極的で、茉莉はそれに引きずられていると思っていたのだが。

「こんなところでレイプ願望までは欲張らないでくださいね」

蕾は、さらっと冗談を交えた。強烈な露出願望を自覚するだけでなく実行している女性と、セックスの前戯としてのライトSMではなく絶対の被支配願望に目覚めつつある女性。互いにそれを知っているから、たとえ（半分だけは）冗談とはいえ、そんなことも口にできた。歳がひとつしか違わないという気安さも手伝っている。

実際のところ、こんな状況で見知らぬ男に犯されるのは、とくにH I V感染のリスクが高すぎる。出発前に事前予防薬を服用しているし、事後用の薬も持ってきているが、インフルエンザの予防接種ほどにも効果は期待できない。もちろん、レイプ犯がコンドームを使ってくれるはずもない。

「ま……中途半端に露出したって、つまらないものね。十万人の観客に見られて、たぶん

動画もバズるかな？ 削除されるだろうけど、それまでに拡散するよね」

顔まで派手派手なラメ化粧でキメるのだから、二人とも顔バレは心配していない。蕾としては――親に知られるのはさすがに困るけれど。SMツアー社の裏添乗員としては箔付けになるんじゃないかと思ったりもしている。やはり、二人に負けない露出願望の持ち主なのだった。

夕方、いったんホテルに戻って。紗耶香と茉莉はボディペイントの下準備をしなければならなかった。蕾は、その必要がない。昨年の暮れに寒中座禅修業をしたときに得度されて、それからずっと無毛を保っている。すこし伸びてくるとチクチクしてショーツをぐしょ濡れにしてしまうという事情もあったが、社長命令でもあった。どうせ今度のツアーでパイパンにするのだから――というのは口実

で。淫毛を巻き込まないだけ、色々と（社長が）愉しめるからだった。

輪ゴムをつないだ禪にしても、針を植えたパンティにしても、無毛のほうが見栄えが良いという社長の意見には、蕾も同感だった。

それはともかくとして。

約束の時刻に（わずか）十五分遅れて、エウリコ・メレンデスが迎えに来た。サンバチームの紹介で雇った通訳というか世話係だった。三人ともスペイン語ができないし、翻訳機だけに頼るのも心許無い。それに、翻訳機は運転免許を持っていない。

「みなさん、パスポートとスマートフォンはもっていますね」

貴重品を持ち歩くかホテルを信用して預けるか。裸で踊るのだから選択の余地はないはずだが。しかし、この三人にとっては別の問題があった。

二週間のうちに十回以上も、三人は警官に

呼び止められている。パスポートを見せると、たいていは驚かれる。一分以上も顔写真と見比べられたこともあった。二十歳の日本女性は、こちらの人間にはせいぜいミドルティーンくらいにしか見えないのだ。顔つきもそうだが体格（ことに凸凹）にいたっては、ローティーンを自称しても納得されかねない。

会場の周辺は交通規制が敷かれているが、通行許可証をウインドウに貼り付けたワゴンでは会場のすぐ近くまで乗り入れた。降りたところは、パレードのスタート地点手前の広場。そこが各チームの集合場所であり、支度の場所にもなっている。

支度とはいうが。九十分おきに三千人から五千人（チームによっては七千人）がスタートするのだから、更衣室なんか無い。みんな、堂々と露天で着替えている。

エウリコに案内されて、これだけはプレハブ小屋になっているボディペイントの場所へ

行った。狭い小屋の中は、十人ほどの特別参加者とその倍の数のスタッフでごった返していた。女性たちはくすぐったそうに身をよじったりしているが、羞ずかしそうにしている者はいなかった。

「みなさん。ハダカになってください」

たちまち前後に男が一人ずつ取りついて、筆でタンガを着せていく。乳房と股間を緑色の唐草模様似たデザインに仕上げ、乳首には銀のラメを散らす。割れ目には内側にまで塗料を塗って、はみ出ている小淫唇は巻き込むようにして隠す。三人はすんなり終わったが、接着剤まで使われている女性もいた。

ちなみに。フロート車を先導するチームは薄い金属製のGストリングを着用するのだが、激しく腰を振ってもずれないように、内側に（ディルドとしては）小さめの突起が作りつけられている。現地に来てそれを知って、そのうち国内のイベントで使ってみたいと紗耶

香は言っているのだが。それはともかく。

ボディペイントが終わって、メイク係と入れ替わる。頬を肌に合わせた色で塗ってから銀ラメを散らし、唇はナチュラルに。そして着け睫毛はまばたきで風が起きるくらい派手に。アイシャドウもくっきりと。三人とも見分けがつかないほど同じ顔になった。

脱いだ服と貴重品はエウリコに預けて。小屋から出てコステイロを背負えば、一夜漬けのソロダンサーの出来上がり。とってしまおうと、三人がかわいそうだ。紗耶香と茉莉はそれなりの経験があるし、蕾でさえ二週間の特訓で、ちゃんとテーマソングを歌いながらそこそこにステップを踏める程度にはなっている。

スタート地点にグループごとに集まって。一見して無秩序な集まりも、スタートの時刻が近づくにつれて隊形も整ってくる。

「はああ……なんだかねえ」

紗耶香が溜め息を吐いた。

「五十人みんな、同じボディペイント。拍子抜けしちゃうかな」

露出願望とはつまり、自分の羞ずかしい姿を不特定多数の人たち（主として男性）に見られたいということだ。自分の美しい裸を一一となれば、ナルシズムでしかない。羞ずかしい姿を見られて（それはもちろん、賛美されたいという思いもすこしはあるが）軽蔑されたいという被虐願望でもある。それには自分ひとりか、せいぜい仲間の数人だけが羞ずかしい姿をしているのでなければならない。ヌーディストビーチでは（性的興奮を伴なう）露出願望は叶えられないのだ。五十人の中の一人という今の状況も、それに近いものがあった。

やがて、長蛇の隊列が前のほうから動き始めた。スタートの合図はあったのだろうが、五百人を超える打楽器隊のリズムとビートに

掻き消されて、三人のところまでは聞こえてこなかった。

三人——いや、ボディペイントにコステロを背負った五十人も、ぴったり合わせたステップを踏みながら前に進む。

スタートからゴールまで七百メートルのコースの両側は、見上げると首が痛くなる高さの観客席で囲まれている。スタンドの歓声は広場までも伝わっていたが。スタートラインを越えた瞬間に、雪崩のような激しさと押し寄せてきた。

一瞬で、テンションが跳ね上がった。背負っているコステロの重さが感じられなくなって、リハーサルするときよりもずっと大きな動作でステップを踏む。まったく意識しないでも、手が動く。

ランナーズハイとSEXのアクメとがひとつになったような、忘我の境地。

蕾は五十人の中の一人ではなかった。十三

メートルのコース幅いっぱいには七人ずつが広がって、二メートル四方の空間で蕾はまさしくソロを舞っていた。数千の視線が裸身に注がれている。乳首もクリトリスも硬くしこり、腰とはいわず全身が熱くたぎった。

これは、淫靡な露出願望の充足ではなかった。サンバの垣根に裸身を投じて、十万人の熱狂と一体化する——稀有の体験だった。

——忘我の六十分が過ぎて。ふと我に還ると、三人で抱き合って地面にへたり込んでいた。まわりでは、大勢の人間がエネルギッシュに動きまわっている。パレードに参加した者だけでなく、家族や友人も入り乱れて、まだ熱狂に酔い痴れているのか撒収に取り掛かっているのかも判然としない。

「ああああああ……もう、死んでもいい」

「あたしは来年もきつと来る——のは無理かあ」

「満足していただけて、わたしも嬉しいです」

いっそう固く抱き合って、幸せを抱き締める。

「みなさん」

肩を叩かれて、今度こそ正気づいた。エウリコだった。

「クルマを、もってきました。のってください」

コステアロを肩から下ろして手に持って、三人はうながされるままに出口へ向かった。途中からいやに人氣が少なくなってきたが、三人ともそんなことに注意を払う余裕もない。

しかし。出口というよりは、フェンスの破れ目の向こう側に停まっている車を見て、蕾に不審が湧いた。乗ってきたバンではなく、ずっと大きなオフロード車だった。年代物というか、あちこちがボコボコになっている。

「メレンデスさん。あなたの車ではないのですか？」

「あそこからここまでくることはできません。

ともだちにべつのクルマをかりました」

スタート地点に乗りつけた車をゴール地点まで持って来るのは、通行許可証があっても困難なのだろうとは思ったが。ポンコツのオフロード車は、どうにも胡散臭い。それに、何人かの男が乗っている。蕾たちをホテルに送り届けるだけが目的なのだろうか。

「一緒に乗っている人たちは、誰なんですか？」

エウリコはそれに答えず――ヒュイツと短く指笛を吹いた。

三人の男が車から飛び出してきて、蕾たちを囲んだ。

「さからうところします」

男のひとりが拳銃を取り出して蕾に突きつけた。オフロード車同様に、ごつかった。

「お金なの？ それともレイプ？」

紗耶香が無意味な質問をした。

「はやくのりなさい」

拳銃が、蕾の脇腹に押しつけられた。素手の二人が紗耶香と茉莉を車のほうへ引きずって行こうとする。

衆人環視の中で誘拐——蕾は救いを求める目で、あたりを見回した。拳銃が怖くて、声は出せない。まだ熱狂冷めやらぬ群衆の中にも、こちらを眺めている者が何人かはいた。が、蕾と目が合うと顔をそむける。集団で女性を拉致してレイプなど、ありふれた光景なのだ。おとなしくしていれば、朝までには解放される。そんなふうにも思っているのだろう。拳銃となると穏やかではないが、それは死角になっている。

蕾も拳銃に押されて後ずさる形で車に追い込まれかけた——そのとき。

長い髪を振り乱した人物——たぶん女性が、こちらへ走って来るのが見えた。

群衆に背を向けていた男たちがそれに気づいたとき、女性は蕾の目の前まで近づいてい

た。女性はスピードを緩めることもなく、拳銃を持っている男に肩からぶつかった。

「ウオッ……?!」

男は弾き飛ばされながら踏みとどまって、拳銃を女性に向けた。が、すぐには撃たない——のではなく、撃てなかった。剥き出しになっている撃鉄を起こそうとする。

そのワンクッションを置いた動作の間に女性が間合いを詰めて。手にしていた短い鎖を男の手首に叩きつけた。

奇妙な角度に折れ曲がった男の手から拳銃が落ちた。

それを女性が拾い上げようとした——が、傍観者の立ち位置にいたエウリコの動きがわずかに早かった。地面に倒れ込むようにして拳銃をひったくると、素早く女性に銃口を向けた。ためらわずに引き金を引く。

ダアン!

女性の体勢がガクッと崩れた。左の太腿を

手で押さえて、その場に膝を突いた。

「レムヘル、トマメ！」

そんなふうに蕾には聞こえた。

紗耶香と茉莉に続いて蕾も後ろの荷物室に押し込まれた。三人の逃げ道をふさぐ形で、撃たれた女性も放り込まれて、最後に男のひとりが乗り込んだ。拳銃は持っていないが、大きなナイフの刃筋を女性の顔に押しつけた。蕾たち三人には、あまり注意を向けていない。

車はタイヤが空転したほどの急発進をして——路上駐車している車を蹴散らすように突き進んだ。すぐに幹線道路からそれて、会場の眩しい明かりから逃れるように舗装されていない道を進む。

撃たれた女性は意識を失ってはいない。が、ナイフの切っ先とナイフを握った男の顔に視線を往復させるだけで、ぴくりとも動かない。

「これって……誘拐なんですか？」

答えようのない質問を紗耶香が発する。

「……………」

蕾は二重の意味でパニック寸前。第一には自分のことを考えてしまうが。SMツアー社の社員としては、クライアント二人の安全を図らねばならない。

ただレイプが目的にしては、やることが大掛かりだし荒っぽい。身代金目的の誘拐なのか。それにしても、この女性は何者だろう。格闘技のプロみたいな動きだった。たまたま気がついて、助けてくれようとしたのだろうか。

思考の空転が続くうちに、車の揺れがひどくなってきた。未舗装の道路からもはずれて、荒れ地を走っているらしいと気づく。

やがて車が停まって。蕾たちは車から降ろされた。ひねこびた樹がまばらに生えている岩場だった。二人の男が、撃たれた女性の両腕をつかんで、近くの岩陰へ引きずって行った。

呆然と立ち尽くしている蕾たちの背後に男が回り込んで。手首を握って頭の後ろで組ませた。

ゲリラ。そんな言葉が蕾の頭に浮かんだ。男が三人にとらせたポーズは、兵隊が捕虜を扱うときの様子を連想させたのだ。

運転をしていた男が、荷物室に放り込まれていた三人の所持品を漁っている。パスポートを見つけると、室内灯の下で開いて一瞥してから。三人の前に立って、分厚いスマホのような物を目の前にかざした。

[*あなたたちは日本人ですね]

機械的な音声が流れる。古いタイプの翻訳機だった。

「そうです。わたしたちをどうするつもりですか？」

感情を抑えて、正確に発音した。

「ぎゃああああっ……！」

岩陰から女性の悲鳴が聞こえて。びくっと

三人が凍りついた。

“ I am an agent...SM-tours limited corpration.”

はっと、蕾が暗闇を振り返った。女性は、たしかにSMツアーと言った。どういうことなのだろう。

バシン、バシンと肉を叩く音が聞こえてきた。

そこに呻き声が重なる。それから、悲鳴。

蕾の目の前の男が肩をすくめて、翻訳機にスペイン語を吹き込んだ。

[*あなたたちを人質にします。身代金が払われたら解放します]

万事休す。そう思った。

身代金を払ったらますます誘拐が増えるからと、人質の犠牲は覚悟で、国家レベルで身代金の支払いを拒否している国が多い。日本はそこまで強硬ではないが、身内が身代金を払うのまでは妨害しないというスタンスだ。

けれど、ネットでの炎上を恐れて身内も及び腰に――いや、それ以前に。二人の身内に身代金を払う経済的余裕があるのだろうか。

「身代金はいくら要求するつもりなのですか」

「ミリオンダラーズ……ポルサナ」

翻訳機を待つまでもない。百万ドル。邦貨で約一億円。ポルサナはパーソナルの意味だから、ひとりの値段だろう。

どう対応しようか。思考は空転するばかり。

数分、いや十分は経っただろうか。岩陰から二人の男が立ち上がったのが、視界の隅に映った。それに続いて、二の腕をつかまれて地面を引きずられている裸の女性。後ろ手錠を掛けられている。太腿には、女性のシャツを引き裂いたらしい布切れが巻き付けられて、それが黒っぽく沁みている。明るい光の下で見たら、血の色だろう。

女性は蕾たちの前に投げ捨てられた。乳房も股間も血まみれで、細い筋が何本も刻まれ

ている。腹にはきついパンチを食らって、変色している。そして、顔にも刃物傷とパンチの痕があった。女だからといって容赦はせず、女だから急所を痛めつけている。

これが本物の拷問なのか。高山社長の薫陶もあって、狎れ合いのプレイではない本物の被虐に憧れるようになった蕾だが……こんな場面は想像すらしたことがなかった。

〔*この女性は、あなたの会社の同僚だと言っています。ほんとうですか？〕

翻訳機から事務的で馬鹿丁寧な質問が流れる。

蕾には、ひとりだけ心当たりがあった。それを思い出した。合衆国にリョナファイトの視察に行って、そのままファイターになってしまった村上詩織。滞在資格の関係で、SMツアー社の現地エージェントとして登録されている。合衆国からブラジルなんて、東京から沖縄へ行くような感覚かもしれない。新米

の蓄を隠密裏にサポートする役目を社長からおおせつかったということは、じゅうぶんに考えられる。

「彼女が村上……いえ、シオリ・ムラカミなら、その通りです」

翻訳機の答えを聞いて、男たちが顔を見合
わす。早口で交わす会話の中から、コマンド
一とかクノイチという単語が聞き取れた。飛
び込んで来たタイミングや闘いぶりから、詩
織を特殊な組織のメンバーだと疑っていたら
しい。

蓄は——詩織のではないが、同じシンジケ
ートが主催したリョナファイトの動画を見て
いる。まるきり素人の女性が一方的に痛めつ
けられるシーンも多かったが、女子プロレス
ラーあたりでは歯が立たないだろうというく
らいに本格的な喧嘩殺法を身に着けた女性も
いた。もちろん、もっと強い男にボコられる
のだけれど。

詩織さんは本格的な格闘家だったんだろうと、蕾は推測した。

[*怯える必要はありません。あなたたちは、このようには扱いません]

翻訳機／男の言葉に、紗耶香と茉莉がほうと息を吐いた。しかし。

[*あなたたちは女性として扱います]

言葉が終わる前に、三人は押し倒されていた。これから何が始まるかは明白だった。

「いやあああっ……！」

「許して。あたしたちは大事な人質なんですよ」

男たちは紗耶香の訴えには耳を貸さず（そもそも、言葉を理解していない）、片足で胸や腹を押さえ付けておいてズボンを脱ぎにかかった。

“Wait a momen Please!”

詩織が英語で話していたのを思い出して、蕾は大声で叫んだ。

翻訳機が突きつけられる。

「この二人はSMツアー社のクライアントです。ガイドの私には、二人を護る義務があります」

レイプとは違って、すぐに解放されるわけではない。何日も監禁されているうちに、同じようなことが繰り返されるに決まっている。それはわかっているつもりだが、所詮は自己満足に過ぎない偽善かもしれないけれど。しかし、こう言うしかなかった。

「あなたたちの……性的欲求は、すべて私が引き受けます。だから、この二人は許してあげてください」

どうせ『順番待ち』なんかはしてくれないだろうと覚悟をして、言葉を付け足す。

「私は、ヴァギナだけでなくアヌスもオーラルも使用可能です。三人で使ってください」

蕾はクライアント二人の反応をうかがったが――呆然自失の中から、目の前で揺れてい

る一本のか細い糸を見詰めるような眼差しで、
蕾を見詰めている。

男のひとりが薄く嗤って。それから翻訳機
に言葉を吹き込んだ。

[*あなたには穴が三つあります。しかし、
わたしたちは四人です。ひとつ足りませんね。
どうすればよいでしょうか]

この Artificial Ideot め。蕾は奇妙に脱力し
た。これほど正確で、しかし状況にそぐわな
い翻訳なんて、カリカチュアでしかない。

“I’m also staff...and her senior.”

詩織の弱々しい声が聞こえた。失神してい
なかったのか、意識を取り戻したのか。

“Please Gangbang me...”

男たちがどの程度まで英語を解するかはわ
からないが、詩織の仕種は理解したのではな
いだろうか。

詩織は傷ついた身体を起こすと、顔をのけ
ぞらせて口を大きく開けたのだった。

男たちが顔を見合わせた。右腕に添え木をして、これも詩織の服を引き裂いた布でぐるぐる巻きにして首から吊っている男が、仲間に何事かを訴えた。

ハッハハハ。仲間は笑って、男の右肩を叩いた。腕の痛みにも男が顔をしかめる。

二人は荷物室の下から牽引用のチェーンや太い縄を取り出して、詩織を近くの灌木へ追い立てた。

残る二人のうちのひとりには監視のつもりか、蓄の後ろに立ったままで。もうひとりが、紗耶香と茉莉を立ち上がらせて背中合わせにした。股間に手錠を通してそれぞれの右手首を拘束すると、二人は動きを完全に封じられた。と同時に。そのままの姿では犯しづらい。願いを聞き届けてやったという、誘拐犯たちのジェスチャーのようにも、蓄には思えた。

二人とは対照的に――詩織は残虐に扱われていた。後ろ手錠のまま、首に太いチェーン

を巻かれて灌木の枝に吊るされている。つま先立ちで、やっと足が地面に着いている。その一方の足首に太い縄が縛りつけられて、斜め上に引っ張り上げられた。身体が傾いて爪先が地面から離れ――詩織が足をばたつかせる。縄を掛けた枝がしなって、ようやく爪先が地面に届いた。詩織が苦しそうに咳き込んでいるのが、蕾にもわかった。かろうじて息はできているようだが、何十分も放置されたら、どうなるかわからない。

腕を添え木で縛った男が、ズボンをずり下げて左手で詩織の身体を抱いた。

「ひどい……」

思わず、蕾がつぶやいた。

詩織はオーラルの蹂躪を覚悟していたのに、腕を折られた男はナイフで傷つけた女性器を犯そうとしている。

しかし、詩織の身を心配してられる状況ではなかった。

片腕を折られた男に手を貸していた男が戻って来て、三人で蕾を取り囲んだ。翻訳機が突きつけられる。

[*あなたはみずから三つの穴を希望しました。それにふさわしい形になりなさい]

仕方なく、蕾は立ち上がった。しかし、男たちは誰ひとりとして仰臥しない。戸惑っていると、後ろから抱き上げられた。

高く持ち上げられて、尻を勃起が割った。身体をゆっくりと下ろされていき、すぐうつとアヌスに突き挿れられた。

「ぎひいいいっ……痛い！ 痛い痛い痛い！」

まったく潤滑されずに犯されるなんて、バギナでも経験したことがなかった。まるきりの激痛だった。ぎちぎちと、乾いた粘膜が軋んでいる。男だって亀頭は敏感なはずだ。痛くはないのだろうか、心配になってくる。男の身を案じてのことではない。男が苦痛を感じたら、それを自分のせいにされて、理不

尽な仕返しをされかねない。詩織が残虐に扱われているのは、腕をへし折った報復に決まっている。

二人目の男が正面で腰を落として、ぐんつと立ち上がった。

「ひiiiiiiii……」

蕾は、破瓜の瞬間を思い出した。いや、それよりも痛かった。

後ろの男が尻を抱えて前の男は乳房を強くつかんだ。

「え……？ や、やめて……落ちる！」

身体が横に傾けられていく。二つの穴の中で男根がねじれて、側面を強くえぐった。

「オラ」

三本目が唇に押し当てられた。口を開けて横ざまに頬張るしかなかった。

三人が思い思いに腰を使い始めた。

「んぶ……んんんんっ……いあいつ！」

寒中座禅修業のときに、蕾は何度も三穴同

時を体験させられている。男たちの一人がペースメーカーになって、あとの二人はそれに合わせた。それが今は――三人がてんで勝手に荒腰を使っている。蕾は激しく揺すぶられ、目まいと吐き気に襲われている。しかも、穴をまっすぐに突かれるのではない。凹と凸の角度は、ほとんど直角に違っている。膣壁も腸壁も、ひと突きごとにボコボコと変形している。これまでに体験したことのない異様な痛みで、それがわかった。亀頭が肉壁に突き当たって、に`よる`んと滑る。その感触が男に未知の快感を与えるのだろう。

「ウオオオオ……エスペンドォ！」

「クェ……エスト？！」

五分もしないうちに、二人までが――ほとんど暴発だった。オーラルを担当している男だけが取り残された。

蕾は頭を下にして、その男に抱きかかえられた。

「ムエヴェテ……」

男が言葉を発したが、蕾には音としてもとらえきれない。

欲望を吐き出してすこしは紳士的になった男の一方が、翻訳機を持ってきた。

[*積極的に奉仕しなさい。休んでいると、このまま手を離します]

逆さにされたまま手を離されたら、頭から地面に叩きつけられる。

蕾は男の腰に手を回してしがみつき、知っている限りのテクニックで怒張に奉仕した。頭に血が下がって目の前が赤く染まり、こめかみのあたりがズキズキ痛む。それでも淫茎に舌を絡め、カリクビを舐めまわし、ずぞぞぞぞぞーっとバキュームする。寒中座禅修業で仕込まれたテクニックがずいぶんと役に立った。

「ワホオオ！ エスタ ペラ！ グラン テクニカ！」

男が吼えた。蕾の喉の奥に熱い滾りが叩きつけられた。男の機嫌を損ねないようにといった計算もなく、蕾の喉が自然と動いた。

「ベビオ ミゼーメン！」

男は感激して。すこしは優しい気分になったのだろう。蕾の身体をそっと地面に放り出した。

「アウン……テルミナーダ？ テンポラーノ」

翻訳機を使う男が、詩織を甚振っている男に叫んだ。これまでの様子から、翻訳機の男がリーダーらしいと、蕾は見当をつけた。

灌木のほうへ目を向けると。詩織は吊るされたまま不自然なほど深く首を垂れていた。男が腰を突き挿れるたびに裸身が揺れているが、まだ生きているとは断言できない。

詩織を吊るすのを手伝った男が、灌木に向かって歩き出した。それに気づいて、蕾はわずかに安堵の息を漏らした。

誘拐犯どもにとって、詩織は闖入者でしか

ない。しかも、メンバーの一人を傷つけている。このまま放置して立ち去るということもじゅうぶんであり得た。そうなると、出血多量が先か縛り首が先か、いずれにしても助からない。けれど、手伝いに行く男がいるということは、詩織を連れ戻すつもりだからだ。

足をつかんで地面を引きずられる詩織を見て、蕾は二度目の安堵を吐いた。地面に肌を搔き毟られるのを避けようとして、もがいてる。まだ生きていた。

四人はふたたび車に押し込まれて——激しく揺すぶられながら、さらに遠くまで連れ去られた。

この後は製品版でお楽しみください。

著 者：濠門長恭

表紙絵：藤間慎三

発 行：SMX工房

<http://goumonchoukyou.blog.fc2.com/>